

特集・医療人類学にとってナラティブとは何か？

——はじめに

田中雅一・澤野美智子

本特集は、京都大学人文科学研究所共同研究班「ウメサオ・スタディーズの射程」（代表：田中雅一、2015年4月～2018年3月）主催のシンポジウム「医療人類学にとってナラティブとは何か？」（2017年2月4日開催）での報告およびディスカッションに基づくものである。

「ウメサオ・スタディーズの射程」は、梅棹忠夫の活動を理解するには、そのオーラルな側面とアーカイヴァルな側面の両方を研究する必要があるという観点から、前者についてはコレクションやフェティシズムの研究を推し進め、後者については主として人文科学研究所に残されている梅棹忠夫の発言ならびに研究会の記録や、公刊された座談会など、これまで無視されてきたオーラルな活動を中心に研究と資料の整理を進めてきた。この点を踏まえて、本研究会では、ナラティブ（語り）を主題にいくつかのシンポジウムを企画、主催した。そのひとつが発展著しい医療人類学を対象にした本シンポジウム「医療人類学にとってナラティブとは何か？」である。以下に本シンポジウムの趣旨説明を再録する。

わたしたち文化人類学者は、フィールドで出会った人々によって語られるナラティブ（語り）を重視してきた。参与観察によるデータに加え、こうしたナラティブの収集や編集を通じて民族誌を生み出してきた。しかし、民族誌記述には大きく二つの問題が認められる。ひとつは、言語化されない（できない）経験をめぐる問題である。このため、人類学者がデータを集める際にナラティブに偏りすぎると、本当に重要なことを看過することになるかもしれない。もうひとつは、フィールドで出会う断片的な語りを編集することで、新たなナラティブを作り上げてしまうという問題である。それは時には社会的に影響のあるマスターナラティブとなり、フィールドでの語りに影響を与えてしまいかねない。本企画では、人類学者がナラティブを編むことの功罪、あるいは言語化されてこなかった、あるいはできなかったことがらを人類学でどのように扱うべきかを主たる問題意

識とし、医療人類学におけるナラティブの可能性と限界について検討したい。

この趣旨に応じる形で、磯野真穂（国際医療福祉大学）、浮ヶ谷幸代（相模女子大学）、新ヶ江章友（大阪市立大学）、皆藤章（京都大学）の4名が発表し、コメンテータとして、星野晋（山口大学）と田中雅一（京都大学）が参加した。ここにあらためてシンポジウムに参加された皆様に感謝したい。

本誌に収めたのは、本シンポジウムの発表と、その後の討論を踏まえて書き直してもらった原稿と、企画者の一人であった澤野美智子（立命館大学）による序、そして参加者の浜田明範（関西大学）と飯田淳子（川崎医療福祉大学）のコメントを追加した。詳しい内容については、序を参考にしてほしい。

その後も第2回目のシンポジウム「証言・告白・愁訴——医療と司法における語りの現場から」を2017年11月11日に開催した。このシンポジウムに基づく論集も近日公刊する予定である。